



図1 2021年1月5日 荒川-多摩川分水界GPS軌跡図-1(赤:往路実走、青:復路実走 黄緑:推定分水界)

埼玉県秩父市と山梨県甲州市の境に笠取山(1953m)という山がある。この山頂西側にある、笠取小屋と雁坂峠の分岐付近には、「小さな分水嶺」と呼ぶ石碑が立っている(写真1、2)。この石碑から西側の山梨市側に降った雨は笛吹川(富士川の支流)へ、北東の秩父市側に降った雨は荒川へ、南東の甲州市側では多摩川へと別れていく。ここは富士川、荒川、多摩川の三大河川の分水嶺である。さらに、10kmほど西北西側に離れたところに位置する甲武信ヶ岳(2475m)は、多摩川の代わりに千曲川が入り、南西に流れて富士川(山梨県)、東に流れて荒川(埼玉県)、北西に流れて千曲川(長野県)となる三大河川の分水嶺である。ここはまた、中央分水界でもある。ちなみに本州の中央分水界で最も高度が低いところは、兵庫県丹波市水上町石生(いそう)の「石生新町」交差点付近の標高95mである。この最低点の東800m付近に「水分け(みわかれ)公園」があり、そこを含めて分水点の延長は1250mlにもなる(写真3)。公園内には水路の分岐点が設けられ、南に向かう加古川(瀬戸内海/太平洋)側と、北に向かう由良川(日本海)側とに分かれている(写真4)。

現在の東京は、荒川と多摩川が作りだした扇状地と言っても過言

ではない。その東京の西半分と埼玉県の南西部に広がる武蔵野台地は、13万年から2万年前の間に古多摩川によって形成された扇状地で、河成段丘群と海成段丘群から成っている。関東山地を西から東に向けて流れていた古多摩川は、青梅あたりから自由に氾濫しつつ、北東方向(武蔵野台地の北西部)にも流れて、入間川と同様、古荒川に合流していたと言われている。古多摩川は、その後2万年前から1万3千年頃の立川断層による隆起の影響で北東方向への流れを止められ、その本体は南方へ向かわざるを得なくなりました。しかし、その延長川の名残である北東側の広い谷底にもとの流路を引継いで、「不老川」(としとらずがわ/ふろうがわ)、「柳瀬川」、「黒目川」、「石神井川」等ができた。青梅駅の直ぐ北側に源を持ち、入間市付近で入間川に合流する霞川も然りである。そして現在では、直接隅田川に注ぐ石神井川を除き、その他の川は新河岸川に合流、その新河岸川は朝霞市で荒川に合流しているが、分水路はさらに赤羽付近の岩淵水門付近まで延びている。ここは隅田川が荒川から分流して流れ出すところであるが、その隅田川も元々は入間川の下流部だったと言われている。

武蔵野台地の高位面である武蔵野面に降った雨は、地表を流れる分については多摩川にはほとんど注ぐことがない。その雨水のほとんどが、多摩川の名残川であろうと推定されている流路を伝って荒川水系に注いでいるのである。多摩川に近い武蔵野台地の西北側から、「多摩川水系」である残堀川、野川、仙川など一部の河川が多摩川に流れ出ているが、石神井川、黒目川、空堀川、柳瀬川、不老川など、その他多くの河川は「荒川水系」である。例えば、青梅駅のすぐ北に現在の多摩川-荒川の分水嶺がある。かつて多摩川は、青梅駅と東青梅駅の北を流れる霞川→入間川→荒川のルートが本流だったが、立川断層により現在のルートとなった。なので、多摩川-荒川分水界はこの付近では立川断層が作り出した隆起核部分と合致している。

荒川水系と多摩川水系の分水界の西端は、笠取山西側の「小さな分水嶺」であり、ここから東に向かう分水界(嶺)の起点である。笠取山(1953m)、唐松尾山(2109m)、将監峠、大洞山(飛龍山、2069m)、雲取山(2017m)、西谷山(天目山1718m)、蕎麦粒山(1473m)を経て、棒ノ嶺(969m)に到るまで、東京都と埼玉県との都県境を成している。そのあとは、徐々に標高を下げて岩苜石山(793m)、高山山(759m)、雷電山(494m)を経て青梅駅の直ぐ北側の標高250~300mほどの丘陵地に辿り着く。この辺りの多摩川は標高150m、青梅駅が200mほどなので、多摩川からこの丘陵までの距離、700~1000mに対して川からの標高差が100~150mという急峻な丘陵である。なお、青梅駅の直ぐ西側から始まる、東京都青梅市と埼玉県飯能市を結ぶ都県道28号線に沿って、北に向かつて黒沢川が流れる。途中岩蔵温泉などを通り、成木川に合流、成木川はやがて飯能市で入間川に合流する。この都県道の直ぐ東側、青梅駅付近の丘陵地は、また、同じく入間市で入間川に合流する霞川との分水界もあり、立川断層の影響を受けたと考えられる、複雑な地形を呈している。

この青梅駅北側の丘陵地の東端が、武蔵野台地扇状地の始まりである。おそらく、立川断層面にほぼ沿った形で分水界は東方向に延び、圏央道の青梅C付近からは南東方向に曲がり、多摩川水系の残堀川の源流である狭山池(瑞穂町箱根ヶ崎)や、不老川源流の駒形富士山(瑞穂町)の近くを通る。狭山池から残堀川に沿って続く立川断層と離れ、分水界は一等三角点のある高根(194m)から狭山丘陵の南西部に入る。標高140~180m程の丘陵地は3kmほどで終わり、狭山湖の南側の標高125mほどの平地に下る。そこは武蔵村山市の三ツ木と言うところで、荒川水系空堀川支流の源流と多摩川水系の残堀川支流の源流とがわずかに100mほどの近さに接近しており、極めて狭隘な地域を分水界が通っていることになる。分水界はそこから日産自動車の工場跡地を突っ切り、玉川上水に行き当たる。その場所は、立川断層によって段差ができていたため、玉川上水が大きく流れの方向を変えざるを得なくなったところだ。玉川上水は、多摩川からの分水を自然に流下させて灌漑面積を効率的に拡大するために付近で最も高いところに通すのだが、東進してきて西武拝島線の武蔵砂川駅と玉川上水駅の間付近で立川断層にぶつかる。そのまま直進しなかったのは、前方(東側)は断層の高い方になり、これは砂利層も高くなっていて、それを下手に突破すれば砂利層へ突入して、水喰土のように水が吸い込まれてしまう恐れがあり、南に迂回して高い丘のないところを大きく曲がっ



写真1 「小さな分水嶺」説明文

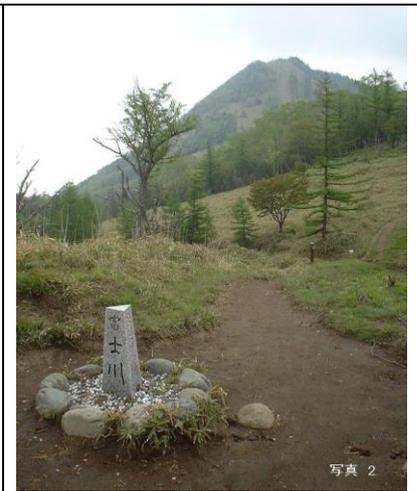


写真2 「小さな分水嶺」の碑、奥が笠取山(2003.06.07撮影)



写真3 本州一低い中央分水界の説明文(2005.04.06撮影)

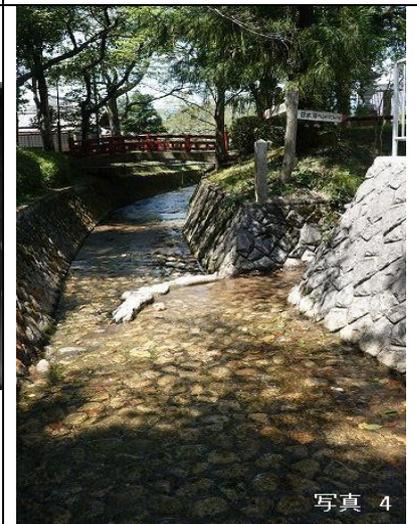


写真4 水分かれ公園(Webより)

たと推測されている。この辺りは標高106mである。玉川上水(=荒川-多摩川分水界)は、そのあとも西武新宿線・中央線の間の尾根の掘削でさらに東進し、三鷹辺りまで続いている。三鷹辺りは、石神井川(→隅田川)と仙川(→多摩川)の分水界であり、荒川水系-多摩川水系の直接の分水界はここまでで、それより下流の内河口寄り(世田谷区付近より下流)になると、多摩川水系の仙川、野川、丸子川が、また、荒川水系では神田川、日本橋川、隅田川が、直接東京湾に注ぐ渋谷川(古川)、目黒川、立合川、呑川などと分水界を形成する。

さて、この荒川-多摩川分水界を実際に探索した記録を報告したい。探索は、玉川上水から青梅までのほぼ平地のところを東から西へ逆方向で行うこととした。2021年1月5日、自転車にて自宅を屋前へ出発。真直に南下、村山上貯水池と村山下貯水池を分ける、多摩湖の真ん中の堰堤を北から南へ突っ切る(写真5)。東大市に入りさらに南下、国立音楽大学の脇を通過して西武拝島線の線路を渡ると、直ぐに玉川上水に行き当たった。拝島線と多摩モノレールが交差する、玉川上水駅の西側に架かる千手小橋の所だった(写真6)。直ぐ西側には「大曲」と呼ばれる、立川断層との交差場所がある。前述したように、断層の高低差を避けるため南側に大きく湾曲している。そう言えばこの辺りの地名は「砂川」であり、立川断層に沿って流れる残堀川の旧名称が「砂川」であつたらしい。砂地の多い場所だったのであろうか。近くにある「大けやき道公園」にて昼食。見影橋を渡って大曲から断層に沿って北西方向に向かう(写真7)。以前、地理クラブで立川断層を探索した場所でもある。



写真5 村山上貯水池



写真6 玉川上水に架かる千手小橋



写真7 見影橋の看板



写真8 日産工場跡南側の道路 凹みと凸部が見える

向に向かう(写真16)。しかし、八高線を横切る道が見つからず、ずいぶん遠回りをしてしまった。そのあと圏央道青梅ICの近くでは雑木林の中に迷い込み自転車での藪漕ぎに苦しめられた。そこを抜けると畑から今度は一転して住宅街になる。なるべく標高が高く見えるところを選んで、青梅に向けひたすら走った。直線距離でおよそ5kmほど走ったところで東青梅駅の北側に到着、霞川も近くに見えた。そのまま青梅駅まで走り、そこから少し戻って北側の丘陵に向かった。これが標高差50mの急登で大いに息が切れた。丘陵地の山頂は公園になっており、そこで青梅駅で買った弁当を食べた。丘陵の北側には霞川が東に向かって流れ出しているの、この丘陵地が間違いなく分水界である(写真17)。ここから引き返すことにより東に向かって丘陵地を下ると、そこが霞川であった(写真18)。

住宅街を抜けると、広大な日産自動車の工場跡地に出るが、立川断層はこの工場のど真ん中を斜めに突っ切っている。工場跡地の南側の道路を見ると、確かに凹んだところと盛り上がった凸部が見える(写真8)。凹んだところが旧残堀川の痕跡らしい。

工場跡地からの残堀川は、立川断層に沿って水源である狭山池に続いているのだが、分水界は残堀川から離れて北上し狭山丘陵に入る。この入り方が少々複雑で、武蔵村山市三ツ木と言うところからいったん東に回り込んで狭山丘陵に突入し、そこから尾根沿いに西進して一等三角点の「高根」に向かう。丘陵の麓で複雑になった理由は、空堀川の支流と残堀川の支流が狭隘な谷に並んで入り込んでいるためようだ。この時、私はまだ深く地図を読み込んでいなかったため、精査することなく武蔵村山から所沢に抜ける道を北上し、「村山温泉かたくりの湯」の脇から狭山丘陵の尾根に出た。この尾根は、東京都武蔵村山市と埼玉県所沢市の都県境界で、やがて東京都西多摩郡瑞穂町と埼玉県入間市との境界となる。この辺り一帯は野山北・六道山公園として整備されており、尾根道はハイカーもランナーも自転車も走れるようになっている。六地藏(写真9)、六道山公園(写真10)を過ぎると、標高194mの一等三角点の高根に到着(写真11)。ここも今は三角点広場として整備されているが、20年ほど前に初めて訪れたときにはヤブの中に取り残されている状態だった。「お伊勢山遊歩道」の急坂を自転車を押して下り、多摩川水系-残堀川の源流である狭山池に到着(写真12)。池に流れ込んでいる水路があったので、ついでにそれも探索、やがて畑の脇を通って八高線の盛り土で消えていた(写真13)。そのあとは、すぐ近くの荒川水系-不老川の源流である駒形富士山付近から、自宅近くまで不老川に沿って帰ってきた(写真14、図1)。5日後の1月10日には、前回の分水界探索の続きを行った。この日は、前回打ち切った残堀川源流の狭山池からの探索である。地図を精査した結果、分水界は高根から南に向かう「お伊勢山遊歩道」ではなく尾根を真西に浅間神社に向かうルートだと判断したので、それを確かめるため自転車を「さやま花多来里の郷」の駐車場に置き、徒歩にて富士山入口→八雲神社→浅間神社→お伊勢山遊歩道分岐を探索した。本当の分水界は浅間神社から真西に富士山入口を経由して「さやま花多来里の郷」のある狭山神社を通ると思われるが、浅間神社から先の尾根には道がなくトレースは諦めた。代わりに50m程もある長い「富士山階段」を下った(写真15)。駐車場から再び自転車で乗り、ほぼ平らに見える武蔵野台地の畑の中を北西方

を探しつつ、「さやま花多来里の郷」の駐車場まで帰ってきた(写真19、図2)。

さらにこのあと1月16日に、狭山丘陵の尾根を狭山湖に沿って一回りしながら、武蔵村山市の三ツ木の分水界を再訪した(図3)。三ツ木は、荒川水系空堀川支流の源流と多摩川水系の残堀川支流の源流とが、ごく近くにあるところだが、前回この近辺をよく確かめられなかったためである。源流までは行けなかったが、空堀川支流(写真20)と残堀川支流(写真21)を確認してきた。二つの川に挟まれた分水界らしき所も確認できた(写真22)。そのあとは狭山丘陵の南面に沿って箱根ヶ崎の方向に向かったが、丘陵の麓に多くの立派な神社仏閣が建てられていたのが印象的だった。

前回の「所沢の河川 源流と下流散策」の報告のあと、富永滋氏から通常我々が狭山丘陵と呼んでいるところは、実は「狭山」という名称のれっきとした山であることをご教示頂いた。添付文書(山岳11巻1号)によると、「狭山」とは『西端が西多摩郡箱根ヶ崎村と入間郡元狭山村、駒形富士山村の間で、脇を県道八王子道が通り、東端が入間郡久米村将軍塚に至る一帯の山脈を総称』とあり、その間には、西多摩郡石畑村、北多摩郡岸村と三木法村(これはおそらく三ツ木)、入間郡勝楽寺村、上山口村などがあるとの記載がある。興味深いのはその当時の地名が現在でもちゃんと残っていることである。JAC所有の明治30年前後に陸地測量部より発行された、「旧版地形図」を見ると、これらの地名が明確に記載されている。旧版地形図にも見える県道八王子道は、現在そっくりそのまま国道16号線になっている。この『山岳』はまだ完成しておらず、ちょうど建設を始めたくらいのタイミングだったようだ。そのため、勝楽寺村、上山口村などの集落はまだ水底には沈んでいなかった。旧版地形図では水没前の地形が見て取れる。なお、記載にある「久米村将軍塚」というのは、鎌倉幕府討幕の軍を挙げた新田義貞が、1333年に小手指原で鎌倉幕府方と対戦して分倍河原で勝利した際に、八国山にある塚に旗を立てたことから将軍塚と呼ばれるようになったとのことである。この将軍塚のある八国山は、当時、多摩郡と入間郡の境界となっていた。駿河・甲斐・伊豆・相模・常陸・上野・下野・信濃の八カ国の山々を望められたことから八国峠と呼ばれるようになったとされ、東側に鎌倉街道上道が南北に通っていたことから、この周辺は幾度となく戦場となっていた。現在は、所沢市松が丘と東京都東村山市にまたがる「八国山緑地公園」となっている。「久米」という地

名は、所沢市松が丘の北側に現存している。余談だが、旧版地形図の「所澤村」を見ると、この当時すでに「川越鉄道」が通っている。これが現在の西武新宿線であるが、明治28年に開通した際は、国分寺から小川、所澤を経て川越に通じていたらしい。ちなみに西武

池袋線の方は、だいぶ遅れて大正4年に武蔵野鉄道として池袋～所澤～飯能を結んだとのことである。両社が合併して西武鉄道になるのは戦後である。
(2021/3/28報告)



写真9 六地蔵 (明治時代に赤痢が発生し、4つの村で51人が亡くなった際、供養のため建立された地蔵)



写真10 六道山公園 奥に標高192mに立つ高さ13mの展望台



写真11 三角点広場の説明文



写真12 残堀川の源流 狭山池



写真13 残堀川の本当の源流 手前は八高線



写真14 不老川源流付近 左奥が一等三角点



写真15 富士山階段の説明文



写真16 ほぼ平らな武蔵野台地 正面: さやま花多来里の郷の山



写真17 青梅駅北側の丘陵地から青梅市街地を臨む



写真18 霞川 源流方向を見る 青梅丘陵地を下ったところ



写真19 八高線沿いの林の道 (私はこの様な道を好んで走っている)



写真20 空堀川支流(下流方面)



写真21 残堀川支流(下流方面)



写真22 ミツ木集落の分水界と思われる場所



図2 2021年1月10日 荒川-多摩川分水界GPS軌跡図-2(緑:往路実走、紫:復路実走 黄緑:推定分水界)



図3 2021年1月16日 荒川-多摩川分水界GPS軌跡図-3(赤:往路実走、黄緑:推定分水界)

自然の住所

山岳地理クラブ

コロナ禍で、なかなか集団で山行ができにくい状況の中、何か新しい取組ができないかと思案していた折、岸由二著「流域地図」の作り方(ちくまプリマー新書)を読んでいて、個人個人が自分の住んでいる地域の水系やそれを取巻く山々をテーマに取り組んでみたら、共通の興味ある目的が見つかるのではないかと思い取り敢えずAGC会員の現在居住している地域の身近な河川や流域を歩いて、自分の自然の住所を確定してみることが、第一歩と考えた。

自然の住所とは:

日頃使っている行政区分による住所ではなく、流域で特定する住所です。例として、「流域地図の作り方」の著者の研究室は

鶴見川流域・矢上川支流流域・松の川小流域・まむし谷流域・一の谷北の肩。となるそうです

これに倣って、会員諸氏より報告していただいた住所は以下のようにになりました。(報告いただいていない方は、編集者側で推測しました)

自然の住所(AGC 会員)

- A氏: 多摩川水系・浅川流域・城山川右岸
- B氏: 利根川水系・渡良瀬川流域・思川流域・姿川流域・新川小流域左岸
- C氏: 荒川水系・隅田川流域・神田川支流流域・妙正寺川流域・江古田川左岸
- D氏: 相模川水系・目久尻川右岸
- E氏: 多摩川水系・浅川流域・北浅川・小津川左岸 or 川口川右岸
- F氏: 旧赤坂川・鮫ヶ谷戸左岸
- G氏: 鶴見川水系・矢上川流域左岸
- H氏: 多摩川水系左岸・下の川・常磐の清水
- I氏: 荒川水系・隅田川流域・忍川(不忍池)・藍染川・谷田川左岸
- J氏: 利根川水系・常陸利根川(霞ヶ浦)流域・花室川右岸
- K氏: 荒川水系・新河岸川支流流域・砂川堀左岸
- L氏: 鶴見川水系・王禅寺?川流域左岸
- M氏: 荒川水系・隅田川流域・神田川右岸
- N氏: 境川流域・小松川支流合流点東・境川せせらぎ公園遊水池横
- O氏: 荒川水系・隅田川流域・忍川(不忍池)・藍染川・谷田川左岸
- P~Y氏 :未調査

以上各氏の自然の住所から、水系別に分類してみると

- ◇ 一級水系 利根川 2名(B、J)
- ◇ 一級水系 荒川 5名(C、I、K、M、O)
- ◇ 一級水系 多摩川 3名(A、E、H)
- ◇ 一級水系 鶴見川 2名(G、L)
- ◇ 二級水系 境川 1名(N)
- ◇ 一級水系 相模川 1名(D)

そのた 1名(F)

いずれも、太平洋側に河口をもつ代表的な水系に属していることは、いまさら驚くべきことではないが、「自然の住所」という目で改めて自分たちの生活を営んでいる場所を再確認してみると、意外と知らなかった地域が身近にあったり、近くを流れている川の源流が、はるか遠くから、多くの支流の水を集め、この先さらに多く



の支流を合せて河口に至っていることを再認識するのである。

そして、川と川の間、我々のフィールドである山と峠の連なりが存在し、その連なりが日本列島の中央脊梁に収斂していく様を、絶えず意識しながら今後の活動のバックボーンとしたいものである。

源流と支流

利根川: 中央分水嶺(群馬県・大水上山東南面)~太平洋(茨城県・千葉県) 主な支流: 渡良瀬川(皇海山)、鬼怒川(日光市・鬼怒沼)、碓氷川(群馬県下仁田町・物見山)、碓氷川(安中市・碓氷峠)、吾妻川(中央分水嶺・鳥居峠)、片品川(群馬県・黒岩山) など

荒川: 中央分水嶺・甲武信岳東面(埼玉県)~東京湾(東京都) 主な支流: 中津川(秩父市・)、入間川(飯能市・)、高麗川(飯能市・刈場坂峠)、新河岸川(武蔵野台地北部)、神田川(東京都三鷹市・井の頭池)

多摩川: (山梨県甲州市・笠取山東南面)~東京湾 主な支流: 日原川(雲取山)、秋川(檜原村・三頭山)、浅川(陣馬山)

鶴見川: (東京都町田市・多摩丘陵)~東京湾 主な支流: 恩田川(町田市・滝の沢公園)

境川: (東京都町田市・草土山)~相模湾 主な支流: 柏尾川

相模川: (山梨県・山中湖)~相模湾 主な支流: 笹子川(笹子峠)、道志川(西丹沢・道志山塊)、中津川(丹沢山塊)、

それぞれの河川の源流から河口までの、支流を含めた流域からのレポートを今後このAGCレポートの紙面に積極的に報告していただくをお願いします。

AGCレポート vol-74 2020年5月20日発行
 発行: 公益社団法人 日本山岳会 山岳地理クラブ
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 日本山岳会 気付
 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
 編集担当: 近藤 E-mail: yoshi-kondo@com.home.ne.jp